

331

特259

8

834

松錦船項態
忠末橋羽坂

井

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



特259
834



松 虫

梗概

(所)攝津國阿部野

(季)九月

攝津の國阿部野の傍に住む者市に出で、酒を賣る處に、毎日來りて酒を
飲み酒盛りをなして歸り行くにぞ、不審に思ひ一日引とめて謂を尋ねぬ。一人の男語
りて曰く「昔此阿部野を二人の者通りかりしに折節松虫の音面白く聞えしかば、一
人の友其音を慕ひて行きけるが歸らざりければ、残りし友尋ね行き見るに、友は草
露に臥して空しくなり居れり。悲しみて懇ろにその亡骸を土中につき、籠めしなり
と語りて失せぬ。酒賣の王哀れに思ひ跡を吊ひければ、田力の亡靈現れ友情の温きを
語り、酒の徳の數々をのべ、更に虫の音の妙なるを忍びて舞ひ遊びおけるが、一夜の
明方にまぎれて姿を失せけりとぞ。

松虫 (四番目)
(三番目)

役別	装束	附
シテ里人	直而 着竹段髪平目 白大口 水衣 腰帶	
シテツレ同	直而 着竹無地髪平目 素袍上下 小刀 又水衣着流シモ	前
後シテ里人の霊	面 怪士 黒頭 着竹厚板 半切 法被 腰帶	前
ワキ酒賣人	着竹 無地髪平目 素袍上下 小刀 前	

松虫

是^{コ長}津の酒安^{コ長}新^{コ長}世の市^{コ長}酒を賣
 男にさゆ。拇もけ程^{コ長}ゆ^{コ長}ぬ^{コ長}よりとも
 知らぬ男の甘^{コ長}あ^{コ長}酒^{コ長}を^{コ長}買^{コ長}飲^{コ長}い^{コ長}が。
 更^{コ長}は^{コ長}悔^{コ長}ら^{コ長}ん^{コ長}残^{コ長}志^{コ長}ら^{コ長}ば^{コ長}か。今日^{コ長}も^{コ長}来^{コ長}り
 て^{コ長}い^{コ長}ら^{コ長}い^{コ長}ら^{コ長}なる^{コ長}者^{コ長}ぞ^{コ長}名^{コ長}を^{コ長}尋^{コ長}ね

をやとあは

立紙
在旁上

もとの秋をも

松虫のネきふもや友を思ふ

らんト秋の月更なるに長月

の有サ明をト見ト風よ立紙袖を

續く市人のト付あひトあつたのべ乃

草葉の露も深緑トをトはまきトは

夕トのト月ト代ト衣ト日トもト出トどト安ト寝トの

市ト路トよトあトらトなトりト幸ト運トあトらトら

程トをトたトこトやト任トのト江ト乃ト浦ト傳トひト

上
汐ト月トもト吹トやト岩ト壁トはト秋トのト草ト

立紙
松トもト空トをトまトてト沖ト波ト波トをトきトきト

友ト誘トふトけト市ト人トのト救トにト我トもト乃ト

人もの安らぎ世のあはれ面おもく
他へ聞白樂天が作まへ酒功賛の
琴待酒の友今ふ志まきて市を散
に樽を据へ杯を双べこよま書
人せ待居るよりいふ人と酒をま
ゆー 我爲い業喜買市にゆら称

とも思ふ方よ同きふ人集ぐと縁こ
しも古人の心を成へいふ面おも
靈酒を汲きてまこかへ流へ
又かの人れ来りたるぞや今相ハ
いひより酒を堪へ地樂地舞の
和方を詠ぐ人の心を慰め給へ

あゝかぬの流ひそまなふ
 我をよめるかぬそまな 中ツルの
 車クルマの音ネを月ツキをよめる見捨ミツケ給テふ
 おまおせまなな何ナニとてけ
 酒サケ友トモをよめる見捨ミツケ給テふおにも
 花ハナの下ノに 暁アカツキ ぬらん車クルマをよめるふ

小○
法

夏ナツ系ケイに因ユヰと作サセられり 梅ウメの
 前マエは餅モチを勃ヒキめては春ハルは月ツキをよ
 める 今イマの秋アキの月ツキ温ユクめ酒サケ乃ナ
 めをよめるまなな ぬらん車クルマをよめる
 ぬせん。なまひ音ネをよめる

秋の友よ別家の秋は又さ
月影は梅の影に花を
香も向へた名も程さ
多幸は秋も限りしが松虫の
きもはさしういふまで草のいひとも
爰らぬ友よその買得る市の寶
タカラ

なま〜
何事にてゆぞ
松虫のきもふ友を思ふと仰らまふ
是は何と申したる事にてゆぞ
語さんか古くは信なる人二人はひ
け松虫と申すしよ。松虫のきもいと

物まじく〜笑〜
中〜
待〜
思〜
空〜
し〜

と〜
日〜
友〜
今〜
者〜

22

11

ちん跡のどく冥冥と暮らしたる
 知れぬやそなたのさすがるまある
 市人の人教は給きて安んずるの
 方ふ海を渡るか
 扱ひせよもて教のしづか
 け復の友人は名跡を將へ通れん

上へ
 杉原秋の暮松林とて暮れ
 とも結つ声ならん
 虫の音も我を待声とておほこと
 一からぬ河原
 思ふ友とておほこと
 か原ら免
 冥冥と暮らしたる

古くはふるも秋の母ふ 人よふ
虫の音もななり 我うとあはれ
しきふららんと思へる人
有難や是を徳の友と忠ぶるよ
松中のまに付あひとぬき
むしは音も連て帰りくる中入

松風をたけ原の 草の夜露
乃とことふ清法となして夜も
まがら彼路と今ぞ有難き
あらし有難のひゆか秋あはれよ
枯る虫は音もあはれ秋あはれよ
あはれ秋あはれよ

来りたり嬉しく弔ひ給ふ物か
あふさかたや夕顔も深みどり
草の花より深きいそ方せこれ
人形の歯よりゆるる有はる人か
申なれや本よのとも昔の友を
物思ふ虫の音もいそ歌をまきて

ま向をいそ草衣の うらハ
難波の里もを記 安部の市人
別して 弔ふ人も ともあは
我も 古今こそ かけごと
古郷は住し同く難波人
芦火たぐやも市屋形も 愛らぬ

224

7

契りを思ふ草の志きぬ友を
かゝあら懐しの心や 志きて
年を経し物と又古しは海を波の
難波の事れすも何れも実備と
なれ友と心や 朝ふあもを
踏んでお付いそいで 夕よ

花鳥は随つと一対おぬる 花れは
花鳥は樂の瓊蕊 月月れ友よ
誘いきて春の山もや秋の野乃
草花よすたく虫ももゆきをん
友ならも心や 一樹の陰の宿りも
他生の縁と心物と一河の流き

汲で志あるを浅くあらぬや奥山は
深谷の下は泉の水汲めども
よもぎし流水の雪は先遮れる
かなりされぬ魚山の古く虎溪を
去らぬ家のこれ其戒めを破りも
心づしを浅くあらぬ思ひの流の

玉水は戒めをわが道とらや
それ貫た古の 同上 世もたけ
いさく道ある友人のかずく
積善の報慶家こに善く廣く
なすらや今の濁世の人を導き
我らふて心も悔らぬや業を湛へ

竹葉のせは皆破りけらば我独り
 醒もせで弟来こか紅葉もどりた
 松むの独寐よ友を待ち醉を
 なして翁奏で抱たん

日 夢をぬぐららば花の袖 黄汚早筆

上 おもころやみ草は舞へ雲は暮るの

日 機ねるまをい きりふりちやう

日 きりふりちやうはむさむさせよ

蚕綯多の也きの中にとどろき

我思ぶ松虫は声 里んりん

日 里んりんておるの声めいきたり 寺上 陸カ

上 ずみ粒波の鐘もぬ方の浅るふも

成ぬべしとらばよ友人名跡の袖を
 招く尾花の反ふ見へて泣きたる
 草花たるはこのよは草花
 ある朝のよは昔年や跡らん
 びのよは昔年やのよらん

錦木 梗概 (所)陸奥狭布の里 (季)九月

諸國行脚の僧陸奥狭布の里に至りしに、夫婦と覺しき男女に會へり。
 見れば珍らしき物を持ちたれば其名を尋ねしに、女の持てるは細布、男の持てるは
 錦木といふ、細布は機張せまき物故胸あひ難き戀にたくへ、錦木は思ふ女の門に立て
 る物にて何れも所の名物なり、殊に錦木は逢ひたき男なれば取り入れ、思はぬ男力
 なれば錦木を捨て置くなりと答へ、猶三年までも錦木を立てたる人のありけるが
 錦木と共につき籠められたる錦塚ありとて僧を導き、吊ひ給へことふて塚の内に
 消え失せけり、僧哀れに思ひ跡を吊ひてあれば、塚の主たる男女の靈現れ、錦木
 を立てし戀慕の様をも見せ、懺悔をなし舞をまひてありしが、曉と共に僧の夢は破
 れ、男女の姿は失せけりとぞ。

上人^{ニ人}の処^トよも心^ト留^ルと^ル物^トの^チ。
 を^レさ^レて^レも^レん^レく^レ名^トの^チも^レま^レ。
 於^レる^レ筋^トを^レ契^ルと^ルか^レら^レ陸^ト奥^ト。
 の^レ狭^ク布^トは^レ里^トにも^レ急^キふ^クり^ク。
 急^キの^レ子^トは^レ陸^ト奥^ト狭^ク布^トの^レ里^トふ^ク。
 て^レは^レ又^レあ^レれ^レと^レん^レま^レば^レ市^ト人^ト数^ト多^ク

来^レり^レは^レ彼^トを^レ待^テた^レ由^トの^レ謂^トを^レも
 尋^テね^レば^レや^レし^レ思^ヒひ^レの^レ連^レ信^トを^レも
 其^レの^レ細^ク布^トを^レり^クも^レ。
 殊^ト本^トや^レ名^トを^レ成^レら^レん^レ陸^ト奥^トの^レ
 信^トま^レも^レ措^レ後^ト故^トよ^レ私^トを^レ初^メは^レ
 我^レら^レと^レは^レ保^レは^レ信^ト中^トの^レま^レに^レ帯^キて

いふじぎ早のいはらねむひもと乾さん
衣まの姿の下流おひともせん
寐もせておまをのりして春の
眺めもいろあらん浅らやそも
幾程の身あしつれを留待事の
有教よて思をぬ人を思ひ寐る

多り現り寐てらるるあてらるるや
慈哀の習ひなる 徒らふ
るるん多るれど身はなは事ハ
後川流きてるまは月日か
上
実や流れく妹身の中の川とや
く 吉野の山に何まぞや爰又

心の奥に陸奥の校布に郡の名ふ
 しくおふ細布の文をそ愛れ縁木の
 子度百敷いしほらこ梅も軽
 なるもなるぞ

やまをある市人せむれが主婦と
 笑しくして女性の持つるなるの羽

にく織たる布と云へり。又男の
 持つるの彩りと思へば、女は彩り
 飾まる本なり。何れも面白き愛
 物あり。是は何と申す、賣物よてゆぞ
 是は細布とて機をとり縁木の布也
 是は又縁木とて彩り飾れる本也。

何も尚ほの名物なり是こ^上良れ人
實^コく^見珠本細布の事ハ漸^上り及たる
名物あり^上扱何故の名物ふ^上こ^上はそ
うたての仰^上れや名^上はお^上珠本細布
のそ^上こ^上ひもな^上く余^上処^上中^上そ^上の^上ゆ^上も
及^上た^上を^上給^上ぬ^上よ^上あ^上ぶ^上 ^上い^上や^上く

史^上も^上の^上理^上り^上。生^上道^上に^上縁^上な^上り
を^上い^上ら^上で^上か^上志^上海^上一^上ら^上ん^上ま^上い^上 ^上見^上
を^上れ^上を^上世^上を^上捨^上人^上の^上意^上氣^上の^上乃^上の^上也^上ふ
條^上む^上け^上珠^上本^上細^上布^上の^上名^上一^上ら^上ぬ^上を
理^上り^上なる^上 ^上意^上面^上白^上の^上也^上答^上や^上か
扱^上珠^上本^上細^上布^上と^上の^上意^上海^上よ^上り^上たる

留きよあふステル 申あれや二年迄
 立を救の珠末を日毎たて
 子束とも録し 又細布はけ
 さま寝くしめおんらあふん
 糸の物あひひぐさ現恋とも録し
 恨ふもよせ 名をもあて

立ぬを種と 録方の白上珠末の
 立なぐらそを柄はけし
 細布物あつとやとはしとも録し
 不そぬのセキ機をりもな現あて
 奇物浴知りやきふや名のみの
 岩代の松は云の義あつとあつ日

室をむかへらるるもき 日
 茂木枯
 村時多き影分兼て是變れ山の
 介後も物瘁て松桂よ啼くも海
 蘭葉の死よ憶るなる物任なり
 塚の草紅葉を深て踏塚の是を
 と云捨て塚の内よぞ入より家

変婦の塚よ入ふなり 中入 牡麻の 三上
 角の中よつるも 篠らきん
 物ら秋風の松下球衣りまから
 声佛事をやなぬらん
 出端 ついで 上
 他生の縁をこぼく物を況てや

徳遇ののまびらえがく宿りまゝ
草の枯れまをく笑へ給ふなよ
あらまの御法やか 作物上 今ヲ持ふ
笑は出なん路まの は 三年のまぬ
古の も 又又ゆまよ今ヲ宵
と目れ値遇ふ今ぞ悔なれと は

日上 庵がかりとの思ひ草の陰よま
又つらる塚の如く歌をまきあるを
お後ぞま は いふならく奈落の
庵ま入ぬれば刹利も首陀もま
けりらま は けりらま は けりらま
不忠儀やま は 不忠儀やま は 不忠儀やま

少上

ツカ

内輝く灯火の影の明らからるる人家の
中に機軸を立錫本を積んで昔を
歌はを靴ひらりきるる友を現るや
かき書すくの書ふやいひよた
る友現と世人を女よ 実や
昔よ書ふ年よいひいひい女よい

いひよの成る友現と人縁人我
能はは懐に娘よをき 実
友なりを現なりともを女
昔を歌うて終夜我よんを娘人
いひよ昔を歌いさんと夕陰草の
月の夜ふ 女境の中に入りて

所^レうらなる^ハ事業^ノの^レ世^ノ歎^ハひ^レる^ハ此
 者^ハ極^メ家^ノか^ハして^ハ中^ニは^レた^レお^レ得^ルなる^ハふ
 物^モ者^ヲと^テ取^リせ^しもの^ハ 此^ノ傍^ノの^レ伴^ノは
 を^レう^レひ^て織^ハ細^布や^珠求^ノの^レ子^ノ度^ニ
 百^レ枚^ヲと^テ經^トと^テも^ハい^ハ物^ハな^らず^もも^ハい^ハじ
 然^レれ^バ今^ヲを^レ難^キ縁^ハよ^クあり^て

日
 妙^ナなる^ハ一^チ糸^ノ妙^ノ曲^ノの^レ功^ノ力^ヲと^テ取^リんと
 織^ハ悔^ノの^レ姿^ヲ及^中に^ハ物^モ取^リな^らず^もも^ハい^ハじ
 夫^レの^レ珠^ヲ求^メと^テ運^バ女^ハ内^ニは^レ細^布の^レ
 機^織る^中の^レき^ハふ^さき^ハく^ハ同^ノ心^ヲと^テ我^レ
 な^らず^もも^ハい^ハじ^ハ内^ニは^レ丸^ノは^レ有^ルを^レ
 と^テ志^ヲを^レ知^ル中^ニは^レ草^ノは^レ何^レも

そのまゝにして取らざるは
まごころと立海ぬを後よ
教も積り来て珠求の色朽ちて
はあぐら甚きは埋き本の
身ならぶかくて思ひよ
珠求朽れざる名を立珠と
名

涙も笑もあがるや恋の珠求とも
は珠求を縁になり
楳のまがさかたはめて
同ドも珠求と縁にたぶ有物
をせめて六年結のころ三年毎り
ついでしてたや徳助のりふと

珠求

名

登トよトうトのトてト有トぬトのト船ト橋トやトく
 浅トるトよトやトなトのトあトんトさトめトぬトさト死トすト我ト
 友ト人トあトらト物トとトさトめトなトまトをト橋ト本トもト
 細ト布トもト多トもト破トれトとト松ト月ト朝トとトたトるト
 朝トのト原ト中トはト塚トとトをト成トとトをト歌ト
アシタ

船 橋 梗概 (所) 上野國佐野

(季) 三月

熊野の山伏、羽黒山に赴く途中上野の國佐野を通りしに、橋建立を
 ます男女に逢ひぬ、山伏乃ち勸めんにも入るべけれど所の人なれば知り給ふ
 べし萬葉集にある東路の佐野の船橋とりはなしの歌意を教へ給へと尋ね
 ぬ、されは男語りて言ふやう、昔此川を隔て、男女住みけるが互に契りをこ
 め、毎夜此橋を渡りて通ひしを男の親これを厭ひ、橋板をはづして逢ふ瀬を
 妨げけり、男かくとも知らず橋を渡らんとし踏みはづして河中に遂ち遂に
 空しくなれり之を歌に詠みしなれば取り離しの意なり、跡弔ひたまへと言て消
 え失せぬ、山伏祈禱をなしければ再び幽霊現はれ出で、男は苦患の様なりしが
 法味に引かれ遂に得脱の身となり消え失せけりとなり。

船橋 (四番目)
(二番目)

役別	装束	附
シテ里男	直面 着付、袷、髪千目、白大口、掛素袍、腰帶、扇	
シテツレ	面小面、髪、髪帶、着付、唐織着流	
後シテ前シテ同	面怪士、黒頭、着付、厚板、半切、注被、腰帶、扇、打杖	
ワキ山伏	兜中、筒懸、着付、厚板、白大口、水衣、腰帶、小刀、扇	
ワキツレ	ワキ同装	

船橋

船橋
の上
の
身

山を分りて條然とく
いふも

森けき杖家
是ハ本山

三態野の山伏ふとくハ我け程ハ

都より上ラテ活陽の寺社残りなく

歸る日グてハ又是より東海江舟と

船橋

船橋

志^シの^チ上^ノ 後^ノ 渡^リの^ノ 野^ノ 洲^ノ 七^ノ 川^ニ 一
か^ノ の^セ 夕^ニ 此^ノ 夜^ニ 待^ツ 年^ニ に
一^ニ 夜^ノ あ^レ 夏^ノ の^ノ 醒^ガ 井^ノ の^ノ 宿^ヲ を
一^ニ 夜^ニ 勝^チ 吹^ク お^シ 海^ノ の^ノ 幸^コ ふ^ノ の^ノ 月^ニ 此
か^キ む^カ 夏^ノ 渡^リ 産^ノ 張^ヲ を^ト 知^レ と^ノ の
一^ニ 夜^ノ 家^ノ 一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の

渡^リ ふ^ル 志^シ 上^ノ 一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の
一^ニ 夜^ノ 急^ニ 程^ノ 野^ノ の

松尾

松尾

東路の佐母の船橋と里放しと。

誰ぞ一秋の心をば知るれはぬり

^中やち程子やせは飛りや身の古も

浅る山 ^ツ 大らき港 [〜] け川の

^上さのみちや [〜] け [〜] だ [〜] 苦 [〜]

多き [〜] 瀬川 [〜] 浮 [〜] 夜 [〜] の [〜] 船橋 [〜]

渡してたをせ給とま ^コ 東路の

佐母の船橋と里放し [〜] 親 [〜] と [〜] くれ

もの物語 [〜] ね [〜] 昔 [〜] 小 [〜] 船橋 [〜] の [〜] さま [〜]

助 [〜] も [〜] ん [〜] 甚 [〜] 為 [〜] り ^中 殊 [〜] 又 [〜] 是 [〜] の [〜] 山 [〜] 伏 [〜] の

橋 [〜] を [〜] 渡 [〜] し [〜] 給 [〜] へ [〜] ^コ そ [〜] も [〜] 山 [〜] 伏 [〜] の

身 [〜] な [〜] れ [〜] ば [〜] と [〜] して [〜] 分 [〜] 橋 [〜] を [〜] 渡 [〜] せ [〜] 給 [〜] へ

このころ争ひ終ひるといふ彼の
 優婆塞を葛城や新し久米路の
 橋いさよ たよまいあはあら
 祢も我も女の葛城の神
 一言業もして止まらばたも度も
 若橋の なごちんは惣孫をぬ

去なぐら余起にてゆも葛城や
 救作るなる若橋あらば渡さん
 事も難うべし 是はなごち
 春の日は長閑水の松橋まきして
 柱も今や花は朽果んを伴
 遠く山伏 所へ同くあ

小 謡
 依野の渡り此の言ふ神お拂
 ぬ毎りつらか條無の。此の言
 なる川月の花吹後を船橋の流
 舞来の片作り流へ山依岩を
 流すも渡りせとをくらでい
 ちをあらたに 万葉集の
 あり

アツク
 東路の依野の船橋取放し
 多くなつたふ。何まらな
 古れ者の中をいを流して
語
 昔はまに住みなる者悲し妻
 河くぐき。ふ川を隔てたれを。
 更の流を敷川。け橋の
ホト

出たりしを二親深く是をいといひ。
 上
 け橋の板を五放川^{ハナ}まをら後にも
 知らぬして^{カケ}熱て^{カケ}熱て^{カケ}橋の上より。
 かんがへて^{カケ}空あある^{カケ}妄物と
 いひ因果とを^{カケ}生後^{カケ}途は^{カケ}流る果て
 紅蓮大如^{カケ}茅の^{カケ}氷は^{カケ}別ら^{カケ}まき^{カケ}

日下
 浮ぶ世もなれた^{カケ}苦しい^{カケ}の海を^{カケ}のら^{カケ}あ
 川橋や^{カケ}波お^{カケ}石は^{カケ}押し^{カケ}苦を^{カケ}とら^{カケ}あ^{カケ}る^{カケ}
 けら^{カケ}バ^{カケ}流る^{カケ}も^{カケ}果て^{カケ}し^{カケ}て^{カケ}魂^{カケ}ハ^{カケ}身^{カケ}を^{カケ}
 責ら^{カケ}ん^{カケ}の^{カケ}危^{カケ}とな^{カケ}る^{カケ}を^{カケ}愛^{カケ}り^{カケ}ね^{カケ}慈^{カケ}草^{カケ}の^{カケ}
 車^{カケ}茂^{カケ}く^{カケ}慈^{カケ}慕^{カケ}の^{カケ}思^{カケ}ひ^{カケ}は^{カケ}焦^{カケ}れ^{カケ}跡^{カケ}
 新橋の^{カケ}古^{カケ}た^{カケ}物^{カケ}活^{カケ}械^{カケ}身^{カケ}の上^{カケ}なり

我^レ江^ノ吊^リてた^レび強^ク 上夕^キ日^ヒ漸^ニく
 傾^キきて 日廣^クの空^もかきく^らら
 雲^となり雨^とか^る中^ウ有^ノの^も
 近^付り橋^とつ^らへ^し中^カ後^ニく^ニ爰^ハ
 正^交東^路の佐^田は船^橋を^心な^し
 禿^クそ^を登^りけ^た夕^暮の空^も別^れよ

成^りる^を 中^入紹^連上^院 ぬ^りふ^し跡^を
 改^めて 二宝^加持^の行^ひよ
 又^障の羅^も消^ぬる^法れ^ちら^そ
 有^難き 出^上者^有難^や
 佐^子之^途不^港 身^なま^しど^も
 法^の力^り船^橋の^うか^む身^とか^る

^上何事も^上懺悔は^上罪の^上雲消て^上ま如の
 月も^上お川^上べー
 五障の^上處乃
 晴^上や^上ある^上春の^上夜^上に^上一時^上胡蝶の
 夏^上の^上戯^上ふれ^上い^上て^上く^上有^上極^上見^上を
 かし^上さん^上 ^上よ^上や^上吉^上雪^上の^上山^上なら^上糸^上と
 是^上も^上妹^上脊^上に^上中^上川^上の^上 ^上橋^上の^上と^上た^上い^上の

^上有^上せ^上る^上と^上く^上い^上た^上ら^上波^上の^上夜^上毎^上ふ
 毎^上ひ^上別^上ら^上浮^上船^上の^上 ^上た^上ふ^上焦^上り
 思^上を^上妻^上 ^上あ^上月^上に^上 ^上あ^上ひ^上別^上ら^上る
 松^上橋^上の^上 ^上江^上へ^上渡^上る^上夜^上の^上月^上も^上半^上ふ
 更^上静^上より^上 ^上人^上も^上子^上よ^上外^上世^上に^上 ^上川
 空^上野^上川^上風^上も^上厭^上を^上 ^上途^上を^上の^上向^上ひ^上の

松橋

岸に居る人新いまの娘や
 頼もや^上たごひよそれ我と
 みつ申の橋を隔て
 立来る波のより羽のそく^{カササキ}の
 羽合のる^イ近く成^修りまに^{カササキ}放せる
 板を踏^イま^マい^フか^マを^チと^チあ^チる

浪を^トき^コり^コカルク^上東^マ路^シの^シ依^シ世^シの^シ船^シ橋^シ
 花^ハを^ハあ^ハく^ハ中^ナて^ナ親^オと^オさ^オく^オれ^オを^オ妹^イよ
 逢^アい^アぬ^アる^アも^ア物^{モノ}の^{モノ}危^イと^イあ^イ川^{カハ}さ^{カハ}
 く^クた^タふ^タ三^ミ途^ツの^ツ川^{カハ}橋^{ハシ}比^ヒ橋^{ハシ}柱^{ハシ}ま^{ハシ}
 立^タら^タま^タて^タ悪^{アク}就^{ジュ}の^{ジュ}舞^{マヒ}合^{カヒ}ま^{カヒ}か^{カヒ}り^{カヒ}り
 後^{ノチ}あ^{ノチ}く^{ノチ}生^{ナマ}死^シ女^メ波^{ナミ}女^メの^メ妻^{ウメ}物^{モノ}邪^ヤ娘^メの^メ

邪神

邪神

悪心と成る我と身を責む苦患よ
 濃む城の者法の味切力ふより
 去如愛心は玉橋の去如愛心の
 玉をこの浮る牙とぞ成るる家
 へんりやう、

項羽

梗概 (所) 唐土鳥江

(季) 九月

唐土鳥江の野辺にて日を暮らしたる草刈男、家路に帰らんとして何時もの如く渡りに到りしに、渡守の老人今日は其挿したる花一本を船賃に賜れといふ、何れにても選ひ給へと言へば美人草の一本を抜き取りぬ、何故其花を擇り給ふやと問へば、渡守の老人答へて、此花は項羽の右虞氏の塚より生ひ出でたるものなれば美人草の名ありとて、項羽戦に敗れて自刎する迄の物語をなし、真は我は項羽よと名のりて失せぬ、草刈達懇ろに供養してあれは項羽と虞氏二人の霊現れ、虞氏が身を投げて空しくなりたる様を見せ、項羽之を歎き口惜かりし敗戦の有様など學び見せて消え失せにけりと。

項羽 (四五番目)

役別	装束	附
シテ老翁	面三光尉(朝倉尉ニモ)尉髪 着竹無地髪手目 水衣 腰帶 扇	
後シテ項羽	面怪士 黑頭 唐冠 着竹厚板 半切 法被 腰帶 扇	
後ツレ虞氏	面小面 髪 髪帶 着竹箔 唐織着流 側次	
ワキ草刈男	着竹絞髪手目 白大口 水衣 腰帶 扇	
ワキツレ同	ワキ同装	

作物 赤權棒 草花

項羽

^{連衣}
^{穿上}
 羽め^クそ^クく^ラて^シ流^シは^シ海^シへ^シ〜
 宿^ルる^草を^尋ね^んん^コは^唐
 烏^ガ江^ガの^種多^クの^草刈^ノて^ハ今^日も
 草^を刈^テて^ハ後^に点^今家^路よ
 帰^リル^ハ中^人野^多六^路の^小萩^ハら。

腰羽

腰羽

小謡

小菅直海カハカヤはる鳥トに世チを。草チから
 ちのこ男ひなくキもと相トと
 只男ひ草ト家トはトかきトばト色トの
 ちのちの救トと相ト持トくキ上トまトを
 臨トの秋ト暮トて枯トれトふトすトくト虫トの
 ちもト死トをト惜トむトをトあトれト

渡コりの船トが向トひトよトれト彼トを待トてト岸トら

うトぎトらトにトくトれト 招連をトふトてトれト

上ト茶ト者ト苔ト路ト滑トうトにトくト僧ト寺トよト帰トり。
 紅ト糸ト声ト乾トくト牡ト鹿ト鳴トあトるト夕トるト音ト。
 心トも浮トぶト面ト白トさトまト秋ト毎トよト世ト分トを
 船トの追ト風トよトてト秋トのト義ト我トぐト露トれト玉ト

なみ〜船コ丸よきらうあふ 舟よ
 呂れゆ 船コ丸後セはバ 是コ丸ハ里
 海ガヨの草刈カヨよそ船後コ丸ばかりさず
 船後コ丸なくば舟ふちけひゆ
 さらば上の漕コ丸入らうさくらふて
 なみ〜る理コ丸ヤ川舟コ丸は呂れた〜

舟コ丸あ〜れ〜と草刈コ丸のよ〜の江よ
 立コ丸芳コ丸バ 夜コ丸あ〜と法コ丸〜ある
 露コ丸刈コ丸乾コ丸て秋草コ丸の〜
 船宿コ丸る月コ丸とや舟コ丸よ舟コ丸を法コ丸らん
 天コ丸の川コ丸あ〜渡コ丸して七夕コ丸の〜
 年コ丸よ一コ丸般コ丸ハコ丸心コ丸きコ丸よ秋風コ丸ぬコ丸あコ丸た

浪の巻キ 湊エ子ニをル海ノ士ト小ノ船ノ水ノ巻
 なニふニ糸ノ末ノの水別ノ掉ノをニいニらニよニ也
 こノがレ掉ノをレいニらニよニ 舟ノをレいニらニよニ
 波ノ下ノりノ久ク 意ノ結ノくレ也レいニらニよニ也
 カレルノ人ニ 扱ノ船ノ賃ノ人ノ 心ノ筋ノも
 中ノ如ク。運ノをレいニらニよニてレ船ノ賃ノ人ノ

持レせレぬレ 船ノ賃ノとシカシセトとシて
 飯ノの後はレ何レもレなシ。更ニ程ノ多クきニ草ノ花ノをレ
 なニどニ一ニ本ノ揚ノりノぬレをレぬレぞニ 也レいニらニよニ
 何レれニもレもレあニまニきニ撰ノ以テ是レれレ也レ
 さニらニばレいニらニよニとシ賜ノりノ也レ 也レいニらニよニ
 ぶニ一ニ也レ。是レ程ノ多クきニ草ノ花ノの中にレ也レ

何とて其の半の身をこゆぞ

是こそ其人草と中なるゆよ

是面白や其人草とハ如の極ある

謂まてゆぞ ちうー項羽言程の

我ひよ。項羽お負給ひ。虞氏と申

后身を投げ空に散り給ひしを。

取上げけ世あめの中に飛籠てゆ。

生墳より生あてらる草なれがとく。

其人草とハ中あらうてゆ

さうべけ席に。項羽言程の戦の極

は物落りゆ。落てゆせ中らべし。

扱も項羽言程の戦を七十余度よ

及ぶ。項羽の兵者心変わり。却て
項羽を攻めきり。四面は國の声を
揚げど。虞氏の思ひは堪兼て。いさ
せん伏し。孫ぶ。よ。い。空を。雅と
いふ馬。い。い。ふ。子。里。を。強。る。馬。なり
し。が。主。の。運。命。を。ぬ。れ。ぬ。終。を。折。て

ぬき。是。時。項羽。の。ち。つ。と。も。響。ぐ。ん。
馬。の。志。が。く。と。た。つ。ま。あ。ぐ。い。ふ
呂馬童。の。我。首。を。て。る。祀。は。屬。
名。を。揚。げ。よ。や。と。呼。ぶ。た。ら。き。と。を
呂馬童。の。怒。れ。と。近。付。は。不。覚。
ある。者。の。心。を。是。ら。ん。よ。後。の。世。ふ

最一切有情利害之界不陸悪意
出端上イッセイイウセイセツガイ
昔八月郷を客お困も今ハ推
聖田は月蘭甚を芳深一鼓筆歌
の声 昔紛として舊名を埋む
さらちまのまざる様も出る出ま
天はし女は個へう家頭ん上おのく

伎楽を奏しつゝ
掃むく琴琵琶の四角は舞の奏を
揚ぐれば又執むの攻め来るぞや
何ら苦みの苦患や
思ひふ堪へ兼く
あへう祿たまひてさの橋よ登りて

落つておぼろから涙の雨は身を投げ
空を成りてを項羽の虞氏が
別れと我身の成りて早急の
露宿を不消果しとひかれ
鈕も身も皆投げ捨て身もたたく
斗りに惜かりし後物残りぞ

仕年
哀れなる中 あはれなき
志意の炎のまよはし
東方をえればその程は屬してあ
来る浪の意なき声は聞けば獲ら
いでお見えんとみ川から強か敵を
近付け取つて投げ捨て又引伏せ

頼朝

頼朝

接首ネヂを運タビぶに怖イかりニきほニひ
 なれを運タビぶニぬきニたニ鳥ニはニの
 母ハもハのハ中ニはニなニとニ成ニよニあるニ

熊坂

梗概

(所)美濃國赤坂

(季)九月

都より東國へ赴く僧美濃の國赤坂の宿にて一人の僧に會ひしに、今日はさる人の命
 日なれば回向して賜はれといふ。さる人とは如何なる人ぞと尋ぬるに名をば明かさず、唯
 吊ひて給へといふにぞ、僧は導かる、まゝに庵室に入りぬ見れば繪像も木像もなく大長刀
 其他の兵具を立て並べありければ、怪しみて謂を問ふに、此邊は山賊夜盜の輩ありて
 往き來の人をなやます事多く、かゝる折には悪僧も長刀取つて出て合ひ危きを救ふ
 りと語り、夜も更けたれば休み給へとて己も一室に入りぬ、其夜熊坂長靴の靈現はれ
 長刀を振つて牛若と渡り合ひ、遂に牛若に討たれたる昔を語り、後世を救ひ給へと乞ひ
 松陰に隠れ失せけりとなり。

熊坂 (四五番目)

ワ キ 社 僧	後 シ テ 熊 坂 長 兼	シ テ 僧	役 別
数珠 扇	角帽子 着付無地髪子目 水衣 腰帶 法被 色鉢巻ノスキ 腰帶 長刀	数珠 扇	装束 附
	面 長靈應見 長籠頭巾 着付厚板 半切	角帽子 着付無地髪子目 水衣 腰帶	

熊坂

是^{日見}都方より出でる傍ふて我
 ちもこの東をよと見せし程よ東國
 乃脚と志^{キヤ}上^ヨ山越へ近江路
 なきや湖の^キ粟津^ノ森も
 見渡る瀬田の長橋うら後^キり

聖蹟篠原に杖をたゝんで。野立
神もあはれふり。地名も我も神も原
なごら。又附程に赤坂の里も昔は
日影のあゝ〜
の事あるは。僧は。やぶ。も。事。の。よ
は。め。の。事。に。こ。ら。の。こ。ら。に。こ。ら。を

今日立志す日。ふ。あ。り。て。は。佛。の。ま
な。り。て。法。の。ゆ。へ。ま。ま。そ。出。家。の
事。を。て。ゆ。へ。お。ろ。名。を。い。何。と。や。た。ゆ。を。て
は。ま。ふ。ふ。ん。と。る。一。め。の。ね。れ。が。一。め。か
の。誓。願。を。そ。我。志。す。古。墳。な。ま。き。
は。復。か。ら。縁。が。中。な。り。さ。志。の。た

なやま^上と名を知らで回向い^カら
らん ^一よし其名^カ名^ラを

とも法界^カの生^カ等^カ利益

^コ出^ソ離^シ生^カ死^カを ^一離^レま^カの

^{同上}吊^ヒひ^カを^カま^カ受け^カバ^カく^カ終^カ令^カ

^小名^カ名^カを^カま^カら^カけ^カた^カを

ま^カま^カま^カま^カ有^カ難^カや^カ回^カ向^カの^カ草^カ木^カ
回^カと^カ渡^カさ^カな^カま^カバ^カ分^カく^カそ^カの^カ
ぬ^カふ^カと^カむ^カ何^カも^カあ^カく^カた^カ相^カを^カ回^カ向^カ
か^カま^カ浮^カま^カで^カい^カら^カ有^カま^カ

^コま^カま^カ入^カて^カ行^カの^カ勤^カめ^カを^カ始^カめ^カう
ま^カま^カに^カて^カま^カま^カある^カ持^カ佛^カ堂^カに^カて

以勤め者うまゝにてハ コカ 勤めを
 始めうまゝと存持佛堂よまゝりて
 了れども安き一終ふを交槍縁
 本縁もななく一壁よ大長刀年杖
モクザキ 小あらざる蹟の棒。其外カ兵具を
 心一とて オカ 密れとて是は何と申

たる事にてハ シ 不慮をよそふ。
 是よ付面白き物語りのハ シ 終ぐ
 中々 シ かんじ シ 傍い シ 初爰ハ
 者にてハ シ お シ 井青暮
 赤坂とて シ 同 シ 名 シ くら シ くら
 子安の成茂ま シ 魚 シ とも シ いた シ ぐ

雨の中チにハ山ニ城ヲ表ニ盗ムのト云ハれ者等。
高ク病ヲとシてハ一ニ里ヲ歩キひの下ニ女ヤ婢ノ
者ヲまでもハおチ剃ギとシてハ流レ流レとシてハ
た極の時ニけレ僧トもハ例ノ長刀とシてハけレ
流レ流レとシてハ急後とシてハ何レとシてハけレ
かレれと云ハいテ亦ト一度はたならん

事トありた極ノ時ニけレあの後ヲ
なる物ぞうとハ悦ビひのば然るト
と云ふ事の心ありなんほう淺る。
一切世ヲ捨テ者ノ形ヲ存シてハ 同中 支院
なまいと柄ノ似合ぬ僧の統立と我レ
おうと思ふとらんを形づら佛ト

蘇陀の利劍や愛深の方便のらふ
矢をとげ多門の跡を横たす
悪人を破伏し災難を拂ぬ
上りて著意悲心は達多が
五逆すすれ方便の殺生は菩薩の
六度了達するは是れ彼を以て

他とは非志をぬきの方すま
悟りも心そやまはるの師と
なき心と師とをたてて義よ
知られりか法の物語りかた
物も明かすしお体あれやの徳
我も海と海人さうぶと眠るよ

入るははらも消て庵室も
草むらとなりて松陰よ夜を
たるふ〜
中入

^上雄麻の角北東のるも〜
きん物秋月の松の下昨夜もすくら
声佛事をやな〜ぬらん〜

^{出上}東南ふ風立て西ふよ雲靜あらは
^上夕雲の秋風烈や北山陰小
木のつらや〜
有明頃
河〜
なま〜
うら〜

巻取

奪ひし悪逆海女婆の執心は是の如
せし浅きしやコカ 徳坂の長靴を
海女の如き時の有極の物語は
上 扱も三條の吉次信高として黄令を
何さなふ商人有てきる何を化つ
奥下るアキウデ 天晴をさくらを

与力の人救は後こそコカ 扱コカよ
集まりし中にありても江列よ
江内の覚えコカ 扱コカ者郎コカを
表付チよコカいコカびコカなコカー
此の其内ふ多き中にも維有コカを
三條の右邊門を其の小猿コカ 火灯コカの

徳坂

八

よまふ分切マキよマはマ 是等コトふ上マのマも
何マらマどマ 是等コトふ上マのマ越前マの
麻生マのマ松マ若マとマ玉マのマ九マ郎マ
加マ加マのマ酒マはマ越前マのマ け長マ乾マを
始マめマとマしてマ究マ竟マはマ捕マのマ益マ人マ等マ。
七十マ餘マ人マはマとマ力マしてマ 者マ次マがマなるマ

逆マさマらマらマ世マふマもマ山マもマ宿マ泊マりマふ
目マ付マをマ附マてマ是マをマとマすマ 六マ乃マ
青マ草マ卷マのマ宿マはマ着マるマくマ愛マ社マ究マ竟マ
のマ所マなマれマもマ場マもマ四マ方マふマ道マ多マりマ
目マをマれマばマ亦マよりマ遊マ君マまマくマ救マ済マのマ
抱マひマ肘マをマ極マまマ 救マもマ更マのマ極マまマ

七

七

吉次は身前後も知らず所たりし
 十六七の小男の目の内人は勝
 たるは清子の透る物合の
 まらざんは惣て 少も外まで
 あらざるは 牛若殿といふも
 知らず 運のそぬる盗人等

期限よれぞ ちや 入まこと
 日 上 我れ程も久くはれ
 我先もと松明を投込く私を
 入る勢ひは妖夜神も面を向べた
 極ぞなきは 牛若殿を牛若子
 怒るをまななく小刀を抜ぞ

法友

十

渡り合獅子奮迅虎乳入花多の
翔のまじと碎き攻め致へんらむ
表子進む十二人同槍は切伏られ
其外を負た方と捨具足と奪られ
浦と近て命斗りと遊るものり
熊坂の極い者ぞまの下の付ハ

いっしゆ由冠神の人間ふんよま
あうと益も命の有りて我
意しよやんとして長刀杖よつま
後めしよもらるが熊坂思ふ
やう物し其冠者ら
切るしよをたれおるらん熊坂

秘術を振ふならびに成天三人を縛
かりて宙小擧んで微塵よなり
討れざる者たのいで供まはし報せん
とて道より取て下例は長刀
引きを免折妻テを小楯よきと
かの小男を縁らひたり牛若子ハ

ぶ流して太刀振るばめ物あひを
かり備て侍あふ熊坂も長刀かや
互ひよかろを待けるがいらん
熊坂丸足をとふみ鏡燈も徹れと
突長刀をとをいしと打てらるる
追熟透らさば込長刀よむらりと

参れぬ向ふな一ぢぢぢと引込
馬より鞍をよ追走して丁ど切バ
宙よて流ぶをよとくもお却
拂へたお着て其俵をくば取も
うせて爰やがこと尋ぬるぬよ
思ひも考らぬらし流より具足
の

透るを丁ど切こいしは彼冠者
お切ら車スキマの獲カまわしマといふ
天命の運れ極めぞ毎オノオノまなるぬ
お物業ル上にて討ふやとくも
にせんとて長刀投捨大まをを返け
爰の西廊がこの法に追走追結

五んスとすれスだスかけスろス稲ス妻ス水スの
月ス名ス女スいスれスきスまスあスらスきスん
ひスきスくスふスすスまスまスいス負スひスぬスく
猛スきスなスらスらスもス弱スりスよスりス弱スてス
いスねスぐス仔スのス其スのス落スあスれスとス滑ス
昔スのス物ス語ス末スのス世ス助スけスたスびス強スくスとス

やスはスあスもス昔ス渡スるス松スもスあスらスくスと
赤ス坂スのス松ス陰スよス像スれスらスりス松スうスげスよ
こスぢスかスくれスもスきス

331

78

著者作權所
領製不許

昭和
改本
版和

昭和五年六月五日印刷
昭和五年六月十日發行

訂正著作者

廿三世
金剛右

京
右
京
剛

發行所兼

檜常之助

發行所

東京市神田區錦町一丁目拾番地
合資會社
檜書

京都市二條通麩屋町東北角

檜書店京都出張所

檜書店

發行

發行

終

